

〔論文〕

## ベネズエラにおけるポピュリズムと政治参加 —「チャビスタ」アイデンティティに関する一考察—

林 和宏 (Kazuhiro HAYASHI)

在ベネズエラ日本大使館専門調査員<sup>1</sup>

はじめに

2006年12月3日の大統領選挙に大勝したウゴ・チャベス・ベネズエラ大統領は、1999年制定の新憲法規定に則り、今年に入って2期目を発足させた。国際監視団が平穏且つ民主的な選挙の実施を評価し、反政府側統一候補自身が一同選挙を管轄した全国選挙評議会(CNE)の不正を臭わせながらも—自らの敗北を認めたことは、国内外におけるチャベス政権の正当性を示すことに貢献した。

大統領選挙からちょうど一年遡った国会議員選挙では、選挙の不正を批判する反政府側が立候補を軒並み取り下げるということもあり、棄権率が実に75%に達した。国会167議席をチャビスタ(チャベス大統領支持者)が独占するという事態の中、同時に指摘されたのは、チャベス政権の動員力の低下とばらまきに依拠したポピュリズムでは何もベネズエラの社会問題を解決しないのではないのか、という有権者内のアパシーであった。その意味で、今回の大統領

選挙結果は少なくとも支持者の動員力に対する憂慮を払拭するには十分なものであり、「チャベス強し」の印象を強く残すものであった。

選挙戦の最中とりわけ目に付いたのは、チャベス大統領が一切公約と呼べる何かを提示することなく、「帝国」なるものの脅威を支持者に煽り、同時にその帝国に奉仕する国内寡頭支配層(オリガルキー)の打倒こそが、社会の変革につながり、彼の言うところの参加型民主主義、社会正義や平等を基礎とするボリーバル革命の成就に結実するとの抽象的な議論であった。同時にチャベス大統領の選挙対策委員会「コマンド・ミランダ」ホームページに設置された「チャベスに投票する理由」には、彼が1999年に大統領に就任して以降建設したインフラや社会プログラムと呼ばれる貧困者救済措置が箇条書きで纏められているのみであり、2007年以降の明確な政治ビジョンは「社会主義体制」への移行というスローガン以外は聞かれることがなかった<sup>2</sup>。見るような(資源)ナショナリズム、反帝

<sup>1</sup> 本稿における見解は個人的なものであり、外務省並びに在ベネズエラ日本大使館の見解を代表するものではない。

<sup>2</sup> <http://www.comandomiranda.org/>を参照。なお、これに対抗した野党統一候補であるマヌエル・ロサレス現スリ

国主義的ディスコース、そしてばらまきに依拠する社会政策を、政治学その他の学問は総じて「ポピュリズム」と捕捉してきた。

チャベス大統領は、自身を貧困者の擁護者であると表象することにより、パリオと呼ばれる貧困地区に住む低所得者、組織化されないインフォーマル労働従業者あるいは先住民・黒人、左派知識人等、旧体制下で阻害されてきた社会層を自身の支持基盤に取り込んでいった。今回のチャベス大統領の再選は、こうしたマージナルなセクターによる政治的承認や、産油国ベネズエラに解決されず根付く貧困や階級格差に対する糾弾の声に対するチャベス政権の対応が一面では評価されており、同様のポピュリスト政策を提起した対立候補よりは実績の上で勝るチャベスに対して票が投じられたといえる。しかし、同時に、チャベス大統領の圧倒的なカリスマが政策云々を越えたところで、有権者の関心を引き続けていることの証左でもあると考えられる。本稿は、チャベス大統領台頭の経緯を追うことにより彼の主張する参加型民主主義の土台となる政治経験を理解するとともに、反帝国や階級闘争等、チャベス型ポピュリズムのイデオロギーを整理することにより、「チャベスタ」と呼ばれる支持者のアイデンティティと彼（女）等の政治参加に対する動機付けを整理することを目的とする。

## 1. プント・フィホ体制下の政治動員

チャベス大統領が採用するレトリックの中で最も重要な要素のひとつが「反政党」であるこ

ア州知事の諸公約もチャベス大統領のそれと何ら変わらぬポピュリスト的政策であるとの批判を受けた。なお、大統領選挙については、拙稿「チャベス大統領再選をめぐるベネズエラの社会対立—12月3日大統領選挙の焦点」『ラテンアメリカ時報』<sup>6</sup>、(社)ラテン・アメリカ協会、2006年秋号、「ベネズエラ大統領選をふり返る」『そんりさ』ラテンアメリカ協力ネットワーク、第105号、2007年、を参照されたい。

とを否定するものはない。これはチャベス政権発足以降、1999年に国民投票を経て誕生したいわゆる「ボリーバル憲法」にも反映されている。同憲法は従来の代表制民主主義に替えて、参加型民主主義を提唱しており、かつて政治社会のみならず広く市民社会までその支配を及ぼした伝統政党(partidocracia)に替えて国民の政治参加や市民社会に重点をおいたもの(democracia)となっている<sup>3</sup>。ガルシア・グアルディージャも指摘するように、同憲法により理念上、市民社会は単なる社会組織の総体としてではなく、伝統政党の媒介をバイパスし、直接政府への働きかけを行う政治・社会的アクターとして台頭した<sup>4</sup>。逆に憲法第67条にも見られるように、かつて保証されていた国庫からの政党交付金が禁止されるとともに、各種選挙候補擁立、党内人事のために党内選挙を実施する旨、各党に義務付けるなど政党への介入を強めている。

チャベス大統領のディスコースにおける「伝統政党」とは、他でもない民主行動党(AD)とキリスト教社会党(COPEI)を指し示すものであり、明確に汚職、社会的排除、差別といったネガティブなコノテーションを付加して使用している。「プント・フィホ体制」とは、1958年のベレス・ヒメネス独裁政権崩壊後の民主化以降、この二大政党により導入された協調民主主義体制のことを示唆する。両党は潤沢な石油収入の分配を基に、企業家、労働者、中産階級を広範に取り込むコーポラティズムで同年以降の大

<sup>3</sup> チャベス政権における参加型民主主義の実例である「地域住民委員会」の可能性と問題点を、ポピュリズムと地方分権という観点から論じたものに拙稿「「社会主義」宣言後ベネズエラ地域住民参加—ポピュリズムと民主主義の相克」『アジア研ワールド・トレンド』アジア経済研究所、No. 141、2007(6月号)がある。

<sup>4</sup> García Gualdilla, María Pilar, “Organizaciones Sociales y Conflictos Sociopolíticos en una Sociedad Polarizada: Las Dos Caras de la Democracia Participativa en Venezuela,” *América Latina Hoy*, 42, 2006, p.39.

統領選挙では 80～90 % と言う得票率を獲得していく。元来、前者が労働者や貧困層などをその支持層としていたのに対し、後者はエリート層を支持基盤としていた。しかし、両者はとりわけ選挙対策を目的としてより広い社会階層からの支持を獲得するため、互いのプログラムを接近させ、ともに多階級的な政党組織へと発展し、交互に政権を担当していった。その結果としてアルバレスも指摘する如く、「アデコ (AD 支持者)」、「コペヤノ (COPEI 支持者)」といった政党アイデンティティは概して階級意識や政治イデオロギーを脱色した、強固で多階級的な集合的アイデンティティを形成していくのである。つまり、プント・フィホ下の政治的アイデンティティとは明確に政党アイデンティティを意味していた。

昨年の大統領選挙で党の棄権方針に反してマヌエル・ロサレス候補を支持したアルフォンソ・マルキナ前国会議員やかつてベネズエラ最大規模を誇った労組・ベネズエラ労働者評議会 (CTV) のマヌエル・コバ議長といった幹部が AD 党を除名となったのは記憶に新しいところであるが、ここに見るのは、同党本部の持つ諸決定事項に対する極めて中央集権化され、ヒエラルキー化された指導体制や、官僚主義的な党の体質である<sup>5</sup>。また、1989 年に組閣したカルロス・アンドレス・ペレス政権以降のいわゆる新自由主義的構造改革に基づいて労組が弱体化し、インフォーマル・セクターが拡大する以前、労組に加盟する労働人口の 80% が CTV に加盟していたとさえ言われるが、AD はコーポラティズ

ムに基づき同評議会を完全にコントロールしていた。組合活動の自律性を剥奪されながら同労組が得たものは、ラミ中でも最高水準と言われる給与体系の保証にあったが、同時に同党の票田として編入され、今日においても同党は CTV に強い影響力を有している<sup>6</sup>。

こうした二大政党の優位は 80 年代以降の経済危機と石油価格の低下により衰退を向かえる。もとよりこれらの政党への「忠誠心」は「不労所得」と呼ばれる石油収入の分配により担保されており、経済危機はこの「パイ」そのものの縮小に帰結した。さらに、ペレス大統領が自身の第一次政権 (任期：1974～78 年) に見せた伝統的なコーポラティズムとポピュリズムをかなぐり捨て、第二次政権では公約に反して、公共料金引き上げ、価格統制の廃止、赤字国营企業の民営化、税制改革、補助金整理といった構造改革を開始すると、支持者は一斉にプント・フィホ体制下におけるエリート・官僚主義、汚職、政治・社会的排除を批判し、それを保証してきた既存の政党に対する不信感を爆発させた。1989 年 2 月 27 日、ガソリン価格の値上げ発表に怒った民衆がカラカス市等で略奪を繰り返した暴動「カラカッソ」がそれである。「組織されない群集」の蜂起、「バリオが坂を駆け下りてきた日」等と形容される反ネオリベラリズム暴動につき、フェルナンド・コロニル等はプント・フィホ体制下の「ショーウィンドー型民主主義」より排除されてきたサパルタンである「民衆 (el pueblo)」の可視化された日であると評しているが<sup>7</sup>、いずれにしても、そこで明るみに出

<sup>5</sup> こうした党の体質は、伝統政党から影響を受けた新興政党にも見受けられる。今年に入って正義第一党 (PJ) の幹部でチャカオ市長のレオポルド・ロベスは、同党内部の権威主義を批判して、マルキナ氏とともにロサレス前候補所属の新時代党 (UNT) に移り、副党首に就任している。PJ 幹部の多くが親の世代から COPEI の影響を強く受けていると言われる。

<sup>6</sup> Márquez, Gustavo and Carmen Pagés, “Ties That Bind: Employment Protection and Labor Market Outcomes in Latin America,” *Working Paper Series*, 373, Inter-American Development Bank, 1998, p.6.

<sup>7</sup> Coronil, Fernando and Julie Skurski, “Dismembering and Remembering the Nation: The Semantics of Political Violence in Venezuela,” *Comparative Studies in Society and*

たのは、「民主主義」の名の下に存在しないものと偽装されてきた「階級」という「他者」への恐怖であった<sup>8</sup>。そしてかかる階級闘争を滋養としつつ、「カラカッソ」を自身の進める革命の起源に据え、ポスト・プント・フィホの新たな民主主義のあり方を模索するのが1992年2月4日に蜂起した後のチャベス大統領である。

## 2. 第五共和国運動党（MVR）と政治動員

### 2-1. 政党アイデンティティから「チャビスタ」アイデンティティへ

既に触れたようにチャベス政権以前のプント・フィホ体制下では、政治的であるということは政党支持者であるということを意味していたとさえ指摘される。しかし、カルデラ前大統領（任期：1994～98年）の頃には、「政党支持者」であることはもはや唯一絶対の政治的アイデンティティのあり方ではなく、選択肢の一つとなった。同前大統領は、COPEIの創設者の一人として知られるが、1993年の大統領選挙時における党内における候補者擁立のあり方に疑義を呈し同党を割って出た。その意味で、「反政党」との観点から扱われるのは正しくないかもしれないが、既にこの段階でプント・フィホがその終焉を迎えようとしていたことは事実である<sup>9</sup>。そしてこの反政党の潮流を決定的なものとしたのがチャベス大統領の登場である。

従前の政党政治に対置される政治的指導者のあり方として今日論じられるのが、チャベス大統領の形容詞ともなった「アウトサイダー」、「ポピュリスト」、「ペルソナリスト」、そして「反政党」を旨とする指導者であり、そうした指導

者を肯定的なものとして支持する国民の急速な拡大である。つまり政党政治への不満の蓄積がそれを糾弾するチャベス大統領というオルタナティブに希望の光を見つけることによって誕生したのが、我々が本稿で論じる「チャビスタ」アイデンティティである。無論、これは後に詳述するごとく、単に「反政党」という考えのみに基礎を置いたアイデンティティであるというわけではないが一つの目安として重要である。

二大政党の崩壊に道を開き、国民の政治参加に道を開いた最大の出来事の一つが1989年に開始される地方分権化への動きである。同年12月に発効した「地方分権、公権力の機能区分設定、移転に関する基本法」以降の動きでより重要なのは、従来大統領による任命制であった地方自治体首長職が公選制となったことである。これにより、中央、特に党の中央指導部との直接的な主従関係で結ばれていたパトロン・クライアント関係が、地方レベルで台頭した新興勢力に代替されていき、二大政党の影響力は相対化されていく。同法制定後初めて実施された地方選挙では、アンドレス・ベラスケス（急進的大義党（CausaR））、カルロス・タブランテ（社会主義運動党（MAS））といった地方の有力政治家が各地固有のニーズを汲み上げるにより支持を獲得して台頭している。こうした文脈で台頭してきたのが、1998年の大統領選挙でチャベス大統領と競うサラス・ロメール氏のプロジェクト・ベネズエラ（PV：カラボボ州）、皆のための祖国党（PPT：ボリーバル州）、正義第一党（PJ：カラカス及びミランダ州）といった今日の有力政党であるが、チャベス大統領所属のMVRもこうした分権化の過程で台頭した政党の一つなのである<sup>10</sup>。

*History*, vol. 33, no. 2, 1991, p. 327-328.

<sup>8</sup> García Gualdilla, María Pilar, *ibid.*, p.45.

<sup>9</sup> 坂口亜紀「ベネズエラの政治危機：経済自由化政策と政党政治の崩壊」『ラテンアメリカ・レポート』アジア経済研究所、1998年、vol.15, no.2, p. 26.

<sup>10</sup> Lalander, Rickard, “Has Venezuelan Decentralization Survived Chavismo?,” *Stockholm Review of Latin American*

## 2-2. MVR の政治動員力に関する考察

チャベス大統領の創設した MVR は、その名称からも明らかなように「運動」としてのポジションを明確にし、年に数度の選挙運動を組織化することにより民衆の動員を行う選挙マシンとして機能してきた。更に、その選挙動員においても上で見た「コマンド・ミランダ」のようなインフォーマルな内部選挙対策組織をその都度に結成し、組織内のヒエラルキーの流動化を図るとともに、意見の不一致や派閥の形成を許容せず、処罰の対象とすることにより、党の硬直化と制度化を回避しているとも指摘される<sup>11</sup>。ラモスによる国会議員に対する意識調査は、このことを証明する興味深い結果を提出している。同調査における「政党なしで民主主義は存在し得ない」との問いに、AD 所属議員の 93.8 %、COPEI 所属議員の 83.3 % が同意を示しているのに対し、MVR 所属議員の場合 47.8 % とその数値が顕著に下がっている<sup>12</sup>。同党議員、ひいてはチャビスタの多くが政党政治に対して示すビジョンを典型的に物語っていると言える。チャベスの言うポリール革命の正当性と民主性は、何を置いても度重なる選挙での勝利によって保証されているのであり、MVR はあくまでそのオーガナイザーに過ぎない。

同党の政治イデオロギー的立場も不明確で、逆説的にもそうした党の姿勢こそがキューバ化を志向する左派知識人からプラグマティックな軍人までを「チャビスタ」として柔軟に包含する

ことを可能としてきた。しかし、大統領選挙での再選以降、チャベス大統領はベネズエラの社会主義体制への移行とともに、それを遂行するための統一与党「ベネズエラ統一社会党 (PSUV)」の結党及び MVR の消滅を宣言している。このことは 70 数年の歴史を持つベネズエラ共産党 (PCV) をはじめ、皆のための祖国党 (PPT)、社会民主主義党 (Podemos) といった与党各党からの批判を受けている。党の看板とアイデンティティを犠牲にしてまで統一与党に統合することのリスクもさることながら、大統領や地方自治体首長の永久再選、軍・民一体及び軍の政治化の提案は独裁や軍部による人権侵害を経験してきた左派諸政党には受け入れられない事実である。

ここで興味深いのが、上に見た 3 党指導部は画一的な思想を押し付ける PSUV への統合を拒否しているにもかかわらず、自らを革命家、ポリール主義者そしてチャビスタであると定義している点である。ここに見るのは一枚岩とみなされがちなチャビスタが極めてイデオロギー的、政治的に柔軟な集団であるという事実と、その「信仰」の対象が統一与党やマルクス主義という厳格なイデオロギー的枠組みというよりもチャベス大統領の指導力、カリスマに向けられているという点である。結論的に言うならば、こうした硬直化されない、非制度的な MVR の党構造は権力の焦点を最高決定責任者であるチャベス大統領に一元化するとともに、そのカリスマが保持されやすい状態としているのである<sup>13</sup>。

*Studies*, Issue No. 1, 2006, p. 30.

<sup>11</sup> Alvarez, Angel, and Acosta, Yorelis, "The 2006 Presidential Election in Venezuela: Electoral Competition and Regime Change," *ReVista: Harvard Review of Latin America*, Spring-Summer, 2006, p. 35.

<sup>12</sup> Ramos, Marisa, "Partidos y Grupos Políticos en Venezuela (1998-2000): Dimensiones Ideológicas y Cohesión Programática," *Revista Venezolana de Economía y Ciencias Sociales*, vol.7, no. 2, 2001, p.163. なお、調査対象は 2000 年の「メガ選挙」で当選した国会議員。

<sup>13</sup> Alvarez, Angel, "Social Cleavages, Political Polarization and Democratic Breakdown in Venezuela," *Stockholm Review of Latin American Studies*, Issue No.1, 2006., p. 23.

## 2-3. 「ボトム・アップ型」政治参加

無論、チャベス政権による民衆動員のストラテジーは、国家や政党（MVR）を通じた上からのものだけではなく、社会ミッション、共同組合、ポリバリアン・サークル、NGO、そしてとりわけ2006年以降は地域住民委員会といった「ボトム・アップ型」のものを通じて実現されている。こうしたセクターに属するチャビスタは、チャベス革命の忠実な実行者であると同時に、MVRという党組織に対して不信任、嫉妬や僻み（resentimiento）さえ抱いているとの指摘もある。これはチャベス大統領自身が、一般庶民の出自を強調し、その擁護者を自認していること、官僚主義批判を当選時からの公約としていることなど、が背景としてある。

ソーライトとハンセンが指摘するように、彼らは、上で見た与党関係者の見解とは対照的に、政府・政党関係者に辛辣な批判を浴びせ、革命を語りながらも高値を維持する石油収入に寄生する「権力者」との比較を嫌ってか、自らを容易に「チャビスタ」とであると定義しようとし<sup>14</sup>。しかしながら、少なくとも今回の大統領選挙結果にも見るように、政府は社会ミッション、各種奨学金や補助金とあわせてこれらのセクターの政治決定への参画の機会を拡大する等して大きな動員力を獲得できた。無論、政府もこうしたセクターが「従順なる羊」で、無条件に友好な関係を取り結べるとは考えていない。むしろ、狡猾に権力との距離を保ち、利益に目ざとい同セクターとの間にヘゲモニックな関係を構築しようと考えている。そしてその媒介＝メディアとして機能するのがチャベスのリーダーシップとカリスマ、ナショナリズムの賞揚と我々意識

の構築、そして想像的な「敵」の領域を捏造するチャベス型ポピュリズムなのである。

## 3. チャベス型ポピュリズムと民衆動員の構図

チャビスタ・アイデンティティはプント・フィホとほぼ同義で使用される「第四共和制」のように、自己のアイデンティティを一義的に政党に求めるものではない。これはMVRの選挙マシーンとしての機能、「ボトム・アップ型」の社会組織の党からの相対的自律性を見るだけで自明であり、与党一党制への統合を欲しないにもかかわらず、あるいは、MVRに所属しないにもかかわらず自己を「チャビスタ」、「革命家」と規定する多くのチャベス支持者の存在からも明らかである。既に見てきたようにチャベス運動は、カラカッソ以降の反ネオリベラリズム社会運動、経済・社会運営失敗による二大政党の権威失墜、地方分権化に伴う民衆の政治参加拡大、そして旧来の強固な政党政治の崩壊に伴いアノミー化した都市貧困層、インフォーマル・セクターあるいは旧来の左派運動等の糾合により台頭した。またこれら諸要因を史上空前の石油価格の上昇及びその分配が後押しすることにより、低・中産階級に属する広範なAD支持層へも侵食していったとされる<sup>15</sup>。その意味で「チャビスタ」アイデンティティは極めて広範でハイブリッドなものである。それでは、こうした多様性を統合し、「チャビスタ・アイデンティティ」を保証しうる最大公約数をどこに認めるべきであろうか。本章ではそれらの要素を「ポピュリズム」というキー・ワードから整理してみたい<sup>16</sup>。

<sup>15</sup> Lalander, Rickard, *Suicide of Elephants? Venezuelan Decentralization between Partyarchy and Chavismo*, 2004, Stockholm University, pp.242-243.

<sup>16</sup> チャベス大統領を、いわゆる「伝統的ポピュリズム」と「ネオ・ポピュリズム」との比較の観点から論じたものに、拙稿「チャベス型ポピュリズムと「民衆的なもの」(lo popular)の位相」『アメリカス研究』天理大学アメリカス学会、第11

<sup>14</sup> Seawright, Jason and Hansen David R., "Dependent Civil Society: The círculos bolivarianos in Venezuela," *Latin American Research Review*, vol. 41, no. 1, 2006.

### 3-1. チャベス型ポピュリズムの整理

チャベス大統領誕生に至る 1998 年の選挙戦において選挙マシンで大車輪の活躍を果たしたのが、PCV、PPT、MAS、MEP そして MVR といった左派政党から成る愛国連合 (Polo Patriótico) であった。しかし、チャベスの真なる支持者とは政党アイデンティティに依拠しない、組織されない民衆であったと言ってもよい。とりわけ国家の経済分野への介入、私有財産の管理などを憂慮させる 2001 年の大統領授権法<sup>17</sup>を通じた諸改革以降のチャベス大統領の急進化を知らない当時の支持者には、労働者や農民、インフォーマル・セクターに代表されるような低所得者層に限らず、旧体制の汚職や官僚主義による民主主義の形骸化を憂慮する民間企業家を含めた一部の上流階級や広範な中産階級も含まれていた<sup>18</sup>。

このように 1998 年大統領選挙に際して、チャベス候補は既存の既得権益層をオリガルキーと批判して、エリート支配の労働組合を糾弾するとともに、伝統政党に所属する政治指導者を汚職や非効率といった観点から強く追求していった。こうした反エリート、反エスタブリッシュメント的言説は、80 年代の経済悪化、そして民衆の暴発、およびこれらを管理し切れなかった腐敗した政治家、官僚に対する国民全般の心を惹きつけ、清新な反政治のアウトサイダーとして急速に台頭した。かかる伝統政党批判は代表制民主主義への懐疑と向かい、そこから排除さ

れた者の救済者であるチャベス独特の民衆政治参加概念、「参加型民主主義」の提唱へと結びついた。

弱者の代弁者、カリスマあふれる雄弁者、そしてアンチ・エリート的な言説は強くかつてのポピュリスト像を想起させるものであるが、同時に、とりわけ国家主導型経済の推進、(資源)ナショナリズムの主張は、30～50 年代中南米一帯に見られた伝統的なポピュリズムの典型的なスタイルを踏襲しているようにも見える。但し、チャベスは、強力な党組織に依存せず(及び党のイデオロギーの曖昧さ)、労働組合よりはインフォーマル・セクターをその支持基盤としており、また MVR のヒエラルキーに軍人が占める割合が高いことなど、かつてのポピュリズムとの差異として指摘すべき点もいくつか存在する。逆に、ネオ・ポピュリズムが基本的にネオリベラリスト的な財政の健全化により調達した資金で広範なセクターの支持を取り付けたのに対し、チャベス政権が一義的に石油収入からその資金を得ていることは、チャベス型ポピュリズムを他国のそれから分かつ重要なポイントである。これに対し、エルナーは、チャベス大統領の有するネオ・ポピュリスト的な特徴として、国民投票によりその民主主義的性格を保証されているものの、議会軽視、大統領のカリスマ的指導力に強く依存した委任型民主主義を指摘している<sup>19</sup>。

### 3-2. 我々意識の形成

ポピュリズムの特色の一つとして、ナショナリズムの称揚、土着文化の見直しなどが挙げられるが、「帝国」と対形的に指定される「我々

号、2007 年がある。

<sup>17</sup> 大統領授権法とは、国会審議を経ることなく、大統領に法律と同等の格と効力を持つ大統領令を発行する権利を委譲するもので、今年に入ってから 1 月 31 日に国会で 1 年半有効な大統領授権法が成立された。チャベス大統領は、授権法を憲法改正、社会主義モラルの普及、地方自治体行政システムの刷新、地域住民委員会の拡大とあわせて社会主義促進のための「5 つの原動力」の一つに位置づけている。

<sup>18</sup> Arenas, Nelly, “El Proyecto Chavista: Entre el Viejo y el Nuevo Populismo,” *Desacatos*, núm. 22, 2006, p.144.

<sup>19</sup> Ellner, Steve, “The Radical Potential of Chavismo in Venezuela: The First Year and Half in Power,” *Latin American Perspectives*, vol. 28, no. 5, p.18.

意識＝革命的アイデンティティ」の発露は、ベネズエラの現状の激化した政治・社会対立を理解するのに極めて重要な要素である<sup>20</sup>。同時に、かかる革命的アイデンティティ、チャピスタ・アイデンティティ形成を理解する際に、チャベス政権とその他のポピュリスト政権の差異を理解することが必要となる。つまり、エルナーが指摘するように、チャベスは階級間の連帯を説き、広範な政治的連合を作り上げてきた旧来の改革派やポピュリストと異なり、既得権益にメスを入れ、授権法を通じてその経済的利益を貧困層に分配することを主張した。その意味で、例えば、強制的な遊休地収用を含むチャベス政権による「反ラティフンディオ」闘争は、旧来の「農地改革」と異なり、社会・公共財産の私有財産に対する優位を主張しており、より「革命的」であると言える<sup>21</sup>。

ポピュリズムを「外からの支配という脅威の下に、民衆と国家とを統合していく共同性表明」<sup>22</sup>への動きと大きく把握しようとする向きもあるが、チャベスの「反帝国」のディスコースはまさにこの典型と言えよう。また、あくまで「帝国」の支配に抗う「国民」が「ベネズエラ国民一般」を指し示しているわけではないことを知ることも重要である。チャベスにとって「国民＝pubelo」とは抑圧された者達の代名詞であり、持たざるもの、表象＝代表されぬ者のことなのである<sup>23</sup>。

<sup>20</sup> いわゆる新しい社会運動と政党政治との関わり、その制度化に関しては、毛利嘉孝『政治＝文化：グローバリゼーション時代の空間の叛乱』月曜社、2003年、を参照。上で引いたソーライトとホーキンスの言う「政府依存の市民社会」論あるいは反政府側の民衆動員を理解する上でも示唆に飛んでいる。

<sup>21</sup> 拙稿「チャベス・ボリーバル革命政権下における「農地革命」の現状」『天理大学アメリカス学会ニュースレター』、2006年、No.55を参照。

<sup>22</sup> Lalander, Rickardo, “Algunas Reflexiones sobre Populismo: Descentralización y Chavismo,” *Provincia*, núm. 11, 2004, p. 42.

<sup>23</sup> 既出拙稿「チャベス型ポピュリズムと「民衆的なもの (lo popular)」の位相」を参照。

その意味で、オリガルキーと呼ばれるベネズエラの有産階級や「第四共和制」時代の有力政治家等は、この抑圧に加担した敵であり、「帝国子飼いの犬」として「国民」の枠外に存在するものとみなされる。こうした他者への憎悪に依拠した階級対立は日々チャベスや政府関係者の言説・実践に再生されることにより受肉化され、民衆の日常生活に入り込み、個人のアイデンティティ形成に影響を与える。

同時にこうした抽象的な言説が広範な民衆の支持を取り付けることを可能としたことにも注意を向けなければならない。遅野井が適切に指摘するようにポピュリズムとは「情緒に訴え民衆の心をつかみ操作するリーダー（ポピュリスト）とそのカリスマの磁力に引かれたフォロワーズ（支持者）の忠誠を特徴とする」<sup>24</sup>と整理できる。かかる文脈において「正しい理論」は必要ない。一貫性や整合性に欠けようとも、チャベスというカリスマに率いられて答えなき民主的「永久革命」—その舞台は日常生活の中にある—toに没入すること、そこにこそ「革命家」としてのアイデンティティ形成の瞬間がある。統一与党のケースでも見たように、政党を媒介せずチャベスというリーダーと支持者が直接、垂直的なパトロン・クライアント関係を結び、自己を文字通り「チャベス主義者 (chavista)」とアイデンティファイする現状は、遅野井の言う「情動」の政治学を支持するものである。弱者の擁護者であるチャベスと従属階級である民衆との間の想像的な連帯関係が、革命というマジック・ワードを媒介に形成されるのである。このように「革命」に体现される「搾取されし者」という集合的アイデンティティがナショナリズム

<sup>24</sup> 遅野井茂雄「民衆の帰依と裏切り：二〇世紀フォロワーシップの政治学」遅野井他編『ラテンアメリカ世界を生きる』新評論、2001年、128頁。

の言語により国民の比喩として登場し、「我々意識」を醸し出すのである。

### 3-3. 政治化する市民社会

1998 年大統領選挙時には、既存の政党からの影響から離れたクリーンな政治家との印象から、現状打破を期待する中・上流階級を含む国民からの支持をチャベス大統領が取り付けたことには既に言及した。しかし、チャベス大統領の急進化が私有財産の侵害や言論の自由の制限に行き着くことを憂慮した有産階級は徐々にチャベス支持を撤回していくこととなる。その最大の契機となったのが、大統領授權法である。エルナーは、チャベス政権の歴史を 3 段階にわけ、その差異を説明している。それによると、就任以降 2000 年いっぱいが第一段階に該当し、この時期はカルデラ政権時代の財務大臣であるマリツア・イサギレをそのまま財務大臣に任命するなど、前政権から受け継いだ経済不況を解決するために極めてオーソドックスな経済運営を展開した。この時期のチャベスをパーカーも「革命家を気取った新自由主義者」としている。しかし、第 2 段階、つまり、国際石油企業に対するロイヤリティ支払い比率を大幅に引き上げ、株式保有の 51%以上を石油公社 (PDVSA) が保有するなど資源ナショナリズムの色彩の強い炭化水素法、遊休農地の接收を可能とする農業・土地法等、急進的な変革を迫る大統領授權法による 49 の大統領令交付はネオリベラリスト・チャベスの仮面を剥がすこととなる<sup>25</sup>。

ここに来てチャベスは国際企業により国民の富である石油が搾取されてきたとの批判を強め、

その背後で糸を引く「帝国」およびそれに結託し甘い汁を吸う「オリガルキー」と呼ばれる国内既得権層への攻撃を開始する。チャベスによるマージナルな民衆の政治への編入と言う民主主義ゲームは「現実的なものというよりはシンボリックなもの」<sup>26</sup>である。ここで重要なのは、チャベスタとは単にチャベス大統領のカリスマに心酔した人々なのではなく、そのアイデンティティ形成は、同時に自らが住まう市民社会における極度な政治・社会対立から大きな影響を受けている。これはチャベス大統領や政府関係者のディスコースに大きく依存するものであり、マドゥリスが強調するように、日々「(アンチ)チャベスタ」なるものがメディアを通じて言説的に、遂行的に形成される<sup>27</sup>。

前節で見た「我々意識」は、カリスマと指導力、そして莫大な石油収入を兼ね備えたチャベス大統領という個人のポピュリズムに大きく依存している。しかし、ナショナリズムにまつわる言説が集団内部の均質性と異質者の排除を基にしていることから明らかなように、同時に、そのアイデンティティは排他性に特徴付けられる。チャベスを始めとする指導者の「革命」言説において、「オリガルキー」、「金持ち」、「汚職」、「政治家」、「第四共和制」等と正反対の属性を兼ね備えているとされるのがチャベスタであり、こうした二項対立な社会の表象は *pueblo* と呼ばれる抑圧された民である「国民」なる概念を分節化するとともに、善き国民としてのチャベスタという表象を作り上げるのである<sup>28</sup>。

<sup>26</sup> Ramírez Roa, Rosaly, “La Política Extraviada en la Venezuela de los Años 90: Entre Rigidez Institucional y Neopopulismo,” *Revista de Ciencia Política*, vol. XXIII, núm. 1, p. 151.

<sup>27</sup> Madriz, María Fernanda, “La Noción de Pueblo en el Discurso Populista,” *ALED*, vol. 2, núm 1, 2001. を参照。

<sup>28</sup> Alvarado Chacín, Neritza, “Populismo, Democracia y Política social en Venezuela,” *Fremtentum*, vol. 15, núm 44, p. 312-313.

<sup>25</sup> Parker, Dick, “Chávez and the Search for an Alternative to Neoliberalism,” *Latin American Perspectives*, 2005, pp.40-43.

今日、チャベスのポピュリズムはレバインとロメロが憂慮を示すように、明確に、「シルクロ・ボリバリアーノ」、共同組合、地域住民委員会といった市民・住民組織の自律性を蝕んでいる<sup>29</sup>。しかしながら、バレンシア・ラミレスの文化人類学的調査が示すように、これらの組織の多くは同時に、自らの思考や利害関係に従い政府と交渉を行っており、全てが補助金を受けた従属的な組織であるというのは誤りである<sup>30</sup>。

これらの組織は、チャビスタ・アイデンティティの拡散に決定的な役割を果たしてきた。上からのサバルタン・アイデンティティの主張とともに、こうした政府を支持する市民組織も「愛国・ナショナリスト」サブ・カルチャー（G・グアルディージャ）を伝播させている。他方で、2004年の大統領罷免投票時に明らかになったように、「チャベスからの脱出」を掲げて一致団結した、新旧政党、メディア、労組、経団連、石油セクター、一部の地方自治体首長、そして、社会運動、NGOは、「民主調整グループ」を結成した。しかし、2002年12月から翌年2月まで続いたゼネストでは明らかに政党及び労組、経団連により社会運動、NGOが周縁化され、同罷免投票の署名収集段階では「主役」の座を務めたにもかかわらずマージナルな位置を甘受することとなった。

このように反政府側においても市民社会は政治化され、それに基づき反政府側セクターのアイデンティティも「政党化」されて行っている。「民主主義を民主化する」との大原則に依拠した80年代以降のベネズエラにおける市民社会

論の隆盛は、このように運動の政党化というジレンマに直面しており、かかる政治ゲームに疲弊した一部の国民はいまや「無党派層（いわゆるNi Ni層）」を形成しつつある。「はじめに」で触れた「アバシー」はまさしくこうした理由に起因している。但し、石油収入の分配からこうしたセクターも恩恵を受けており、積極的にチャベス打倒を主張するようなことはないが、その動向如何によっては、一部の批判的なチャビスタを巻き込んで反政府勢力に転ずる可能性を否定できない。

おわりに

見てきたように、チャビスタ・アイデンティティはプント・フィホ体制下における経済・社会政策の失敗およびそれに起因する新自由主義政策に対する不満を原資として自己表明を行った民衆層を基礎としているが、同時に、地方分権化により拡大した民衆政治参加と二大政党の権威失墜との所産でもあると言える。

我々が見てきたのは、まさに政党アイデンティティからチャビスタ・アイデンティティへの移行であるが、とりわけチャベス大統領個人のカリスマや話術、指導力に依拠するポピュリズムの性格が強い。しかし、同時に指摘できるのは、社会運動やNGOといった市民組織と巧みに交渉し、下からの動員を可能としているという事実である。既に触れたように、在野のチャビスタは上からの強制に批判的であり、上からの無条件な動員を良しとしない。そのためこうしたセクターとの「交渉」を保証するのが、チャベス大統領のカリスマ、石油収入に基づく各種の援助、そして自身が革命プロセスの一員であり、「主役」であるとの「我々意識」であると考えることができる。その意味で、チャビスタ・アイデンティティを一方的に上からの動員による

<sup>29</sup> Levine, Daniel and Catalina Romero, “Movimientos Urbanos y Desempoderamiento en Perú y Venezuela,” *América Latina Hoy*, 36, 2004, p. 60.

<sup>30</sup> Valencia Ramírez, Cristóbal, “Venezuela’s Bolivarian Revolution: Who are Chavistas?,” *Latin American Perspectives*, vol. 32, no. 3, 2005.

ものと考えるのではなく、個別の運動や利害関係を下から「革命」に接合していこうとする複雑なアイデンティティの交渉に注視する必要がある。

従来政治過程より排除されてきた貧困層が参加の主役となる参加型民主主義それ自体はポジティブな現象である。但し、そこで主張されるナショナリズムと我々意識とは、多くの心理学的考察が指摘するように、他者の排除を旨とする排他的なもので、ベネズエラに極度の政治・社会対立をもたらしている。経済危機と二大政党制の崩壊により可視化された階級対立はチャビスタ・アイデンティティの形成に甚大な影響を与えている。

アイデンティティの諸理論が教えるように、アイデンティティとは状況的であり、可变的である。無論、チャビスタ・アイデンティティについても同様のことが当てはまる。とりわけ、チャベス大統領による民衆動員の背後にある潤沢な石油収入は世界的な石油市場と地政学に依拠しており、今後の見通しがつかない。また、今年に入ってから本格化した「社会主義化」へのプロセスは、既に見た統一与党結成問題以外にも、社会・共有財産の私有財産に対する優位、予備役・徴兵制度の強化、飲酒・喫煙の制限さえも含む社会主義モラルの強化といった、チャベス派内部でも賛否両論のあるテーマを表面化させており、「社会主義化」に対する一種の「踏み絵」の様相を呈している。併せて、「不労所得文化（＝石油収入依存）」に慣れきった「黄金郷」の民であるベネズエラ国民に禁欲を強いるこの革命は未だ緒に就いたばかりであり、今後その進展如何では、それへの賛同あるいは拒絶といった具合に、チャビスタのアイデンティティに大きな影響を与えることが想定され、今後の動向が注目される。 ■